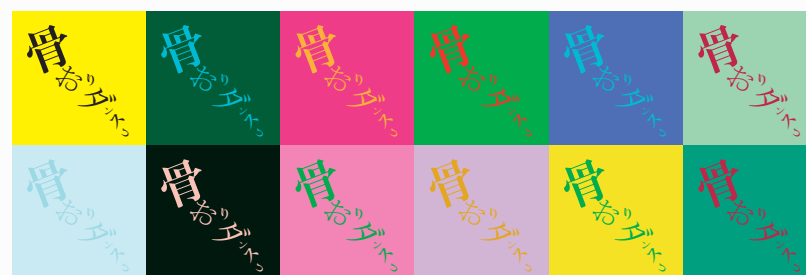


vol.03

2011.04.15



目次
詩誌 骨おりダンスっ
vol.03

〔寄稿〕

小笠原 鳥類……03

夢の生物学を広げる(チャート式の生物の本を読む)

河野 聡子……09

マンダリン・コスモロジー 0

橘 上……12

ヤッポペ! いぢろう君のうた / I HATE ANAMIYA / リーディング映像

榎本 櫻湖……16

紫煙のなかの間歇泉 / ハビタブル・ゾーン 観音さやぎ / わたしは肥溜め姫 / 何々についての云々、それから補足的な

〔公募〕

小田原 のどか……24
むりえわ

〔緊急企画・巻頭座談会〕

揺れる現実 / 現実を揺らす……29

—— 私たちはなぜ「骨おりダンスっ」二号を発行したのか、これからの方位——

〔骨おりダンスっ〕

カニエ・ナハ……39

ヴォルペルティンガーと、森の方舟

金子 鉄夫……57

びおとーぶ / 注釈・Mさんへ

疋田 龍乃介……59

愷気の独楽

金山 大地……61

失題、即ち闘争マシーン漂流記(抄・終)

兼梶 綾……67

四月生まれ / いつか猫を殺す

吉田 恭大……70

椅子・1

〔連載〕

萩野 亮……71

批評と詩のあわいで—— 犬について

〔編集後記〕……72

夢の生物学を広げる

(チャート式の生物の本を読む)

小笠原 鳥類

私は高校の頃は生物を勉強したいと思っていたが、あまり集中して勉強しなかったし、テストで良い点数をいただけなかった。現実の生物の勉強ではなくて、青いイカやクラゲの生物の夢を見ていたということだったと思います。思うエピソード。

当時は、数研出版のチャート式の生物の参考書の、カヴァーの、顕微鏡で撮影された(のだったかな)とても鮮やかな紫や緑の透明なプラスチックのような写真を見たり、カヴァーを取り外したら現れる、濃い緑の表紙と、小さな金色の題名の文字を見たり、本の中の、今よりも温かい、少しぼんやりしたカラー印刷の絵や写真、今よりもザラザラしている文字を見ていたが、生物についての言葉を文章を目覚めて読んでなかった、ああ、眠って夢で見ていた。

その頃の私は岩波文庫の『萩原朔太郎詩集』(改版一九八一)を見て、おおカヴァーに緑色がある、光っているようだ、『月に吠える』が白くて青くて冷たい、犬が透明な影だ、詩「ぼくてりやの世界」がある、古い印刷の字はふるえている、顕微鏡とテレビを使って小さな部分の動きや形や光る緑色を見ていた、と思いつながら集中して読んでいる夢の生物学でした。かくして現実の勉強はおろそかになる。国語の点数は悪くなかったと思います。

最近

あの、思い立って、数研出版のチャート式の、最近の、鈴木孝仁・本川達雄『新生物1』(二〇〇四)と『新生物2』(二〇〇五)を、二冊で五五〇ページくらいあって事典のようだが、できるだけ…:できるだけ…:できるだけ(目覚めながら)数日で最初から最後まで読んだと思う。著者の一人である本川さんは生物学の重要な文章を歌にして歌う人でした、テレビで歌うのを見たことがあります(だったと思う)、『新生物2』には最後に「**人類進化のうた**」の楽譜と歌詞があった、ああ、ネアンデルタール人が消えた(三万年前)ということも歌っている、高校の音楽の授業で歌うのかもしれないピアノ。私は高校の頃に音楽の授業がなかったが、クラリネットやアコーディオンを見ていることが多かった(演奏し

ない)。楽器は光る。アコーディオン這う。

今のチャート式の本は、カラーの絵や写真の印刷が私の高校の頃の本よりも非常にはつきりと明るくて光っている白いキノコのようなものであると思った。半ば眠って読んでいた部分もあったのかもしれないし、困難であるなあと眠ってしまつて適当に読んだつもりになったり、間違つて読んでいる部分もあるかもしれないが、黄色い花や虫やカンガルーの写真があつて光るようなカヴァーを取り外すと現れる表紙は、淡いベージュ色の淡い凸凹のある地味な紙で（題名などいくつかの文字があるだけの表紙）、ああ、高校の頃に使つていた数学の数研出版の問題集には、このようなものもあつたよ（あの本の表紙は青かつた）、ということ思い出した。

おお、ここでチャート式の生物の本を読んで、思ったことを書いていく予定なのだが、間違つた夢を書くことになるだろう。こんなことを書いてしまつて良いのか、こんなことを…と思ひながら。『新生物2』の「第2編 生物の進化と分類」（チャート式の本からの引用はゴシック体にします）から見ることにしましょう、と、NHKで、NHKで、このようなことを言つていた人がいたなあと思う。画面で静かに落ち着いて話す人と黒い板があつた。黒い板にイカが貼つてあることがある透明。蛍光。この緑色の光る画面のゾウリムシの動きを見てください…群れを見てください…踊り

あ、赤い線で四角く囲まれたChartの一つなのでとても重要なのだろう赤字の部分、引用すると、

「**爛（カン）** しておるぞ **しるこもお盆** **石炭ストーブ** **にここに** **みなさん**
重箱 **白菜** **みんなが** **しあわせ**」

（二二八ページ）と驚くべきことが書いてあるので、本当にこんなことが書いてあるのか、私は現実を見ていないのかもしれない。これは何かというと、**カン** ブリア紀、**オルドビス紀**、**シルル紀**、**デボン紀**、**石炭紀**、**二畳紀**（ペルム紀）、**三畳紀**、**ジュラ紀**、**白亜紀**、**第三紀**、**第四紀**の語と順番をこの文章で覚えなさいということのようです夢か。覚えやすいかどうかは知らないが、まじめであるのだろうと思える本にこういう文章が出てくると私は夢を見ているのだと思う、朔太郎ばかりや世界で泳ぐクラゲなんだと思う。しるこや重箱や白菜と

いう語がどこから出てきたのか知らないのであるし、「たとえば、ギリシアの哲学者アリストテレス（紀元前4世紀）は、ウナギは泥から生まれるとした。」（一二五ページ）知らないことはナマズの口から出てきた。それは電気ナマズであつたのだと思う。ナマズの口は他の魚を食べるだろう。にんじん を、ナマズが、食べる熱帯魚であつたので、あれば……

「エディアカラ動物群」（一三二ページ）カラーの赤や緑や淡い淡い紫の生きものの絵が、やや小さく、描かれていて歳時記なのだと思つた。ヒラヒラ水中で動いていたのだと思うクラリネットも。「多くは現生の生物群との類縁関係はわかっていない。」このあいだサラダに入つていたよ。

「バージェス動物群」（一三三ページ）芸能人のように有名でテレビでもコンピュータで描かれ光っているスターたちがアノマロカリス、オパビニア、ハルキゲニアなどのカンブリア紀であつたなあ。謎が——とても——とても——多い、この人たち（人じゃない。クマじゃない）パンダではないが、この者たちについての本をいくつか読んだこと、ありました。（アノマロカリスは）エビではないクラゲではない！楽譜ではなくて、どの熱帯魚の図鑑を見ても野鳥とニワトリが少ない虫。

熱帯魚の図鑑にはコリドラスが多いなあ これは今生きているナマズだ。小さい

「デボン紀は魚類の時代といわれる。」（一三四ページ）デボン紀は魚類の時代といわれるデボン紀は魚類の時代といわれる 本を開くと魚がいるし、あるいは、水の中に魚がいました。それから虫の羽の中に魚がいて、ミミズクも魚を食べていたのだと思うイルカ たち。この引用の文章の下にシーラカンスの暗い乾いた写真があつて、口をサメのように大きく開いているので、私はこれはラジオの機械なのではないか映画、と思つていた。映画には虫が多い映画もあるし、エビが多い映画があつた。この、湖、エビが、多くて、クラゲの、ように、水中に、浮んでいる。エビの時代 ワニ

「中生代の想像図」（一三七ページ）ティラノサウルス、トリケラトプス、プテラノドン想像する想像する。想像して水の絵の具を使って描く描く。するとドロドロの絵の具が恐竜になつたりウニになつたりウナギになつたりするんだ。

それから絵の具の入っている箱からワニが登場するパーティーもあるし、箱の背中、周囲には星の形のシールが貼つてある銀色でした。上、上を見ると、カモメが軽い材料で作られて浮いている。ああ、いくつかの化石のカラー写真のページがあつて、石の色がわかる。「恐竜の足跡の化石」(一四四ページ)なぜなら宇宙から来ました。今の手の上にアノマロカリス

「カギムシ」(一五一ページ)むかし熱帯魚の雑誌で、木の上を這うカギムシの静かな写真を見ました。足が多くて、写真なので動きがなかった。厚さがわからない

今の私、青い淡い色の丸い小さな機械で、CDを聞いている。いくつかのブラームスの交響曲や協奏曲聞いていた アダージョも。およぐCD

「ヤツメウナギ」(二五一ページ)おお、やつめうなぎ、「生きている化石」の、一種であるシーラカンスのようだ、ということが言われ、クラシック音楽のオーケストラは乾いた魚を持っている人たちの集まりである。最近「オーケストラを作ろう」と書いてある紙を歩いて見ましたが(あれはコピーされた紙)、魚を描いた油絵を集めた。あれは鮭の絵もあるようだった塩。

「分子系統学の研究によって、菌類は、より動物に近いことが示され、菌類を植物から分けることの妥当性が支持された。」(一六九ページ)菌類は……カビやキノコであるし粘菌、変形菌であるのだなあ。動物に接近してくるので映画。サメが人を食べる映画がありました、サメではなくてキノコだったかもしれないと考える妥当、妥当。それからアニメで猫やネズミがキノコであったのかもしれないと思いましたテレビで朝に再放送再放送を見ている古いアニメは色が暗くて楽しかった温かかった。ムラサキホコリカビはアニメであるのだと思います。最近、いにしえのアニメを軽い丸いディスクで記録して売っているのかな、細胞性粘菌は移動する。移動する時期がある。

「光合成細菌のもつ光合成色素はバクテリオクロロフィルであり、」(一七〇ページ)、朔太郎ばくteryや世界、バクテリオクロロフィル世界。文字は緑色に印刷されて、ふるえるようだった。緑色のゼリーが呼吸をしているのでメロンの味ではないかと思つたが鯉が食べてしまったのではないか。しかし私は植物にあまり興味がなくて、植物についてのページは素早く読んだのか読まない

のか通り過ぎる。植物の本が多い本棚の前にいない。本棚は木だ。金属である。金属についても興味がないのかもしれない。化学や物理について勉強した方が良いのかなと思います……

あーここで別の本の話を書きますが、数研出版の鈴木孝仁監修『改訂版 視覚でとらえるフォトサイエンス生物図録』（二〇〇七）は二五〇ページくらいのかなり大きな図鑑のような、ほとんどのページがカラーで喜びながら開く本であるのです（機械が広がる宇宙の海のようなカバーが泳ぐ楽しいウミガメもいる黒い青い）、そこで、「クマムシ」については「高校で学習しない」（二〇二ページ）と、書いてありました。乾燥して一〇〇年後に湿らせると蘇るクマムシ、体長1mm以下の。高校で……学習しない……高校で……学習しない……大学の古い研究室で乾いて生きている、木の枠がある、ガラス、ケースの、中。私は大学に入学して文学部で詩について多く勉強したはずであるが、クマムシについて勉強していたのかもしれないでした。多くの種類のハゼについて。

次に、チャート式の『新生物1』を見ることにします。ああ、見たい部分だけ見て引用して紹介しているようで、まじめな勉強をしていない夢だなと思う。いろいろ飛ぶ（スズメも）。序章で「アリストテレスは、ミミズは湿った土から生じると考えた。16世紀になっても、ネズミは小麦とよごれたシャツから生じたという記録がある。」（一一ページ）シャツにはいろいろな文字が印刷されていただろう。それはとても多い文章だったのかもしれない。黒いシャツに灰色の字だったかもしれない。

それからこの『1』の「第2編 生物の生活と環境」で、一七六ページで、「発電器」について、書いてあって、シビレエイ、デンキウナギ、それからデンキナマズだった。「デンキナマズ」の写真があつて、デンキナマズと、川（湖、あるいは水槽なのだろうか）の丸いような石もいくつかある写真だったので、昔見たことがあるハゼの写真を思い出していた、ハゼが水面から出てきたのだったと思う。暗い石の色の熱帯魚の本が昔。

一七七ページ、「発光器」の話。ホタル、映画の題名のような「発光物質ルシフェリン」岩波文庫の緑も発光する朔太郎だと思つたし、中島敦の『山月記・李陵 他九篇』（一九九四）も高校の頃に見ていた緑色の岩波文庫の光だった。

虎は光る動物であると思ったし、熱帯の光る海についても中島敦は魚について魚について書いていること、あった。透明な水の魚を多く見たのだっただろう。魚やウミヘビの名前が多く並ぶページが青く緑色だった。『生物1』によると、一七七ページで、甲殻類の海のウミホタルが、「ホタルルシフェリンとは異なる」ルシフェリンを……紫色の光だろうか。「ほとんど熱を発生しないので、冷光とよばれる。」冷たいイカが光だ。

「イカの巨大神経」(一八二ページ)。そこに、魚の一つの部分でもあるような(呼吸をするのか)、白いものの写真が……「大きなニューロンとして研究者に愛用されたのがイカの巨大軸索であった。」これを使って地球の全て、わかる。岩波文庫のカヴァーの緑も光るだろうし、イカの巨大軸索が速く情報を伝えて、イカは素早く逃げる畑で。(畑?)

「光に集まったミドリムシ」(一九二ページ) 緑色。写真を見ると、ミドリムシという字の形の光にミドリムシが集まって、ミドリムシという字が緑色のミドリムシの集まりである。緑色の字になった。朔太郎みどりむし世界。RNAワールド——それから——DNAワールド。とても緑色になった水槽が並んでいて明るい科学の建物が並んでいる夢の道路を歩き続けて雨も明るかった……それから私は、とても表紙がいろいろな濃さの緑色の縞模様になっている、石川統編の、大学生のための基礎シリーズ『生物学入門』(東京化学同人、二〇〇一)を、最初から最後まで、できるだけ……できるだけ読んだのだし(どれくらい読めたか不安だが)、この本についていつか何かを書くかどうかわからないけれども、お、お、

それから、それから次に、緑色の暗い表紙に、二羽のヤンバルクイナ(!)今叫びたかった、の写真がある、大学の教科書であるだろう、石川統編『生物学 第2版』(東京化学同人、二〇〇八)を、読み始めるのかもしれないなかった。夢を変えるアメーバ。ふざけた読み方になるかもしれないし申し訳ない……

マンダリン・コスモロジー 0

河野 聡子

その日タンジェリンと名付けた父を打ちあげた
ひざまで上がってきた水につかり

ありあわせの雷管は導火線式しか残っていない
火薬しめつてないかな

ポメロが心配した

大丈夫湿つてないよ

キノットがライターで点火した

発射された父はぼん、と音をたてた

翌日みかんの香りのする雨が降りました

母はマンダリンと名付けられとうのむかしに水の底にいます

ひざまで母に覆われていたのに父まで打ち上げなければならなかった

カラタチとバンペイユ、筒を押さえて

ライターの火が導火線に移ったとき、キノットのワイシャツのポケットをとめたクリップがおちた

カラマンシーの指はインキまみれだった

だれが話す、とぶつぶつ言った

だれが語ることができる、と

何を言ってるのかよくわからないのは口内炎だから

ジャバラおまえ言え。

父を打ち上げたのはおまじないのようなものでした

ペンギンが飛ぶと縁起がいいと呼ぶ

そんなもので耐用年数が過ぎていきます

よくある終わりに刃向って打ち上げてみました、おまじないを

よくある終わり、小さなモニターで眺められる

公式見解というやつです

ここにいるのは、キノット、ポメロ、カラタチ、バンペイユ、カラマンシー、

黙って立っている黄色いのはユズ

声明を発表しなければみとめてもらえないので、生命だと（笑って）

発明しなくてはならない、持っていないものを

眉をあげて

ユズの髪の毛にチロリアンテープが巻いてあった

ずっと前にプレゼントしたチョコレート箱のリボン

水がもものあたりまで来ようとしてもチロリアンがうれしかった

ずっとチロリアンはスイスの小人の名前だと思っていた

荒れた環状道路に野良育ちのらっぱ水仙が咲き乱れていた

暗渠の壁にしたたる水はみかんの香りがした

全宇宙の総体を覆う外皮に近づけば近づくほど

みかんの香りがする

葉を落としたニセアカシアの列の終わりから三番目に

黄色い実をつけた樹が一本だけ立っている
どこにいてもユズはそんなふうに見える
きつとそんなふうだったから、じゃあまた。さようなら。
と立ち去って
救いでかけたのだと思う
きわまでたどりつくとみかんの香りがする
水に覆われたこの宇宙をかたる理論に名前をつけた
母の名をとった

(連作「マンダリン・コスモロジー」オープニング)

ヤッポペ!
いぢろう君のうた

橘
上

反戦運動ができなくなるから
戦争がなくなつては困る
だなんて

いぢろう君ムチャクチャ言うなあ

「人を感動させようという
浅ましさに
私は祈るのです」

俺は雨宮が嫌いだ。とにもかくにも嫌いだ。しかし、このことを誰にも言ったことはない。誰かにこのことが知られ、理由を尋ねられてもしたらと思うとゾツとする。何故なら俺は雨宮が嫌いな理由を答えられないからだ。そもそも雨宮はいい奴だ。先輩を立てつつ、後輩に気を遣い、同期にはぎつくばらん話をする。それは雨宮を嫌いな俺にも変わりはないし、雨宮が俺の仕事のミスをフォローしてくれたのも一度や二度の話ではない。生理的に嫌いというわけでもない。雨宮の身なりは清潔感に溢れているし、同僚の中では割にいい匂いがする方だ。では俺と性格が合わないかというと、そうでもない。雨宮の考えに共感することは多く、雨宮と話すと会話は大方盛り上がるし、その時間を俺は楽しいとさえ思う。しかし俺は雨宮が嫌いだ。とにかく嫌いだ。雨宮を嫌いな理由をあげようとしても浮かんでくるのは雨宮を好きにならない理由ばかりで、浮かび上がるのはただ、嫌いという言葉だけだ。なんでもいい奴なんだよ雨宮。お前が嫌な奴だったらストリートにお前のこと嫌えるのに。お前がいい奴であればある程苦しいよ、俺は。お前がいい奴であることが憎いよ。何でもいいからお前を嫌いになる理由をくれよ。頼むよ。頼むから何かムカツクこととしてくれよ。何でもいいんだよ。とか思ってる矢先に、俺の落した消しゴムを曇りのない目で俺に渡すなよ。そんなお前を嫌いな俺やるせねえじゃん。何でこのタイミングで消しゴムを拾うんだよ。止めてくれよ。責めたよ。雨宮を嫌いな自分を責めたよ。こんな雨宮嫌って申し訳ねえって。何で自分を責めなきゃいけないんだよ。誰を好きになろうが嫌いになろうが俺の勝手じゃないか。俺の気持ちは俺だけのサンクチュアリだろ。その聖域に、善行を重ねることで土足で入りこむのはやめてくれ。これ以上善行を重ねるのはやめろ、雨宮。そこまでされたら、もう俺後がないじゃん。崖っぷちだよ。お前が愚かな行為をするか、俺がお前を好きになるかしかないんだから、好きになるしかないじゃん、俺。というかそこまで俺を追い詰めんなら、いつそお前を好きにさせてくれよ。もういつそ好きになりたいんだよ、お前を。早く楽にしてくれよ。何だよ、この寸止め。いいこといっぱいやっておいで、ギリギリ俺に好かれないうこのライン。一思いにお前を好きにさせてくれよ。普通な、いいことされたら、相手のこと好きになるよ。でもお前は俺に好かれる部分だけをかすめずにいいことをするんだ。何でそんなことになるんだよ。俺けっこう人好きな方だよ。卑怯で有名な黒崎ですら好きなんだぜ。人が好きな俺がいて、人に好かれるお前がいる。ここどこに嫌いという感情が入る余地があるんだよ。わざとか？ わざとなのか？ わざとでそんなことできるのか？ わかった。わかったよ、雨宮。じゃあ俺も妥協するよ。もうお前に善行を止めろとは言わない。お前の善行を俺は許すよ。ただ、善行を重ねるなら、俺に好かれるポイントもしっかり突いてくれ。いいことかつ俺に好かれないうことという、ピンポイントばかり狙うのはやめてくれ。何だその特殊な善行は。重ねるなら

ただの善行にしてくれよ。お前の善行は難解なんだよ、俺にだけ。俺がどんだけ悩んでんのかわかってんのか？ ああ、もう言っちゃまおうかな。タブーとされてた「雨宮嫌い」の一言を直接お前に言っちゃろうかな。いや、ダメだ。もし雨宮が俺の気持ちを知ったとしても雨宮は俺を許すだろう。俺を許すなよ雨宮。却って俺は心苦しくなるじゃねえか。何故俺を許すんだ雨宮。頼むから俺を許すのはやめてくれ。もうこのままでは俺は壊れてしまう。俺を殺す気か雨宮。しかし雨宮に殺意はなく、そこにあるのは善意だけだ。お前の善意が俺を犯す。犯すなら罪で犯してくれ。罪でないもので俺を犯すなんて卑怯だぞ。そしてその卑怯なことをするお前が、卑怯さからはほど遠い人格をしているというところが尚更俺を混乱させる。いつそ罪を犯してくれ、雨宮。頼むから罪を犯してくれよ、雨宮。いつの間にか俺は人の罪を願うような奴になっちゃまってんじゃねえか。俺、こんな奴じゃなかったんだぞ。お前の非の打ちどころのない人格は俺の人格さえも変質させるな。

ここまで来ると恐怖ですらある。俺は雨宮を見ると、まず嫌いという感情になり、そのことを申し訳ないと思いつつ、何故こうなってしまったのかと恐れおののいてしまう。雨宮と話す時はさらに事態は深刻だ。雨宮と野球の話で盛り上がり、楽しい気分になった裏側で、嫌いという感情が迷い子のように浮遊し、その二つの感情の渦の中で困惑しつつもバランスを取り、申し訳なくなると同時に恐怖に陥りながら、口先では野球の話題を続けているという感情のフルスロットル状態になるのだ。雨宮と話す俺の感情が疲れる。話すたびに嫌悪、高揚、喜楽、謝意、恐怖、罪悪感と己の感情を総動員しなければならぬからだ。はたから見れば他愛のない話を楽しげにしているだけなので誰にもこの感情はわからないだろう。この気持ちは俺だけのものだ。いや、もはや俺のものでもないのかも知れない。俺はこうまでして雨宮を嫌う自分の感情がわからない。俺が嫌いさえしなければ全ては丸く収まるのだ。嫌いという感情一つで全ての歯車が狂ってしまったのだから。もはや俺の感情は、俺にとつては他人だ。俺は雨宮という他人に振り回されているのか、俺の感情という他人に振り回されているのかすらわからなくなってしまう。もう何にもわからない。何も言葉が浮かんでこない。ただ一つ言えることは、俺は雨宮が嫌い、ということだけだ。しかし、このことは誰にも言えないことなのだ。

※この作品は2011年4月3日サンズイ第十回公演「渴」にて、即興朗読したものを再構成したものです。

<http://www.youtube.com/watch?v=uMwS1CNPbZ4>

画像をクリックすると動画ページへジャンプします

橋上単独リーディング公演

¥橋上

2011.3.5

GALLERY MAKI



紫煙のなかの間歇泉

榎本
櫻湖

はばたく
弛緩した鉄塔
の左端から洩れる夥しい立体
草臥れた
冬の血小板
陰湿で
猥雑な下水道の奏でる音楽
排泄されることを企む
暁闇にまぎれる舌
涎をまとって
頻りに
蠢動を重ねる安息
悶える唇を
嘯みきる
それぞれの握力
複雑な腹部に躡く函
悪辣で陰惨な諧謔を繙き
簡潔な自己愛を変調させる磁気を
墳墓に佇む冬の華やぎは
吸血している
循環する発電所の定理
露悪的な受胎
瓦解する海底の宮殿
摩耗した智慧

疑惑の花卉に埋もれて

余白、

苔生す

水瓶の擬態は

剥がされた義足への

くちづけを求める

(滴る秒針)

(翻る裸婦)

なだらかな鐘、

傾いだ顎の無花果、

胸鱗の呼気、

苺の蔓に掴まって

杖がわりに閉塞させる

夕暮れどきのマンション

耐熱硝子のうえの林檎

狼狽える厭かな蛇

おどける煩惱の裂け目

虚飾の河口へと蒐集される

その部分を絶え間なく弾くことで

緊張を和らげる震える伝言

走り書きを勾引す夢

怨恨を塗りかため

さらなる誘惑

蟠る蹄鉄の腫瘍を

跨がった焦慮に縫いつけ

混濁する脱獄の洗礼に

緊縛の困惑へと

掠めざる錨の

不毛な模倣

蘇生の礎

蔓延る甘美な遺骸
ひたすら耽溺の汚穢を
嘗め擦るように
しわぶく陰翳
球形の憤慨を諫め
砂像の隣で煌めく琵琶の
秘かな戯れを帯びる
黝い点描の聖域
雨滴の果てない喘鳴
変容しつづける光沢の僥倖
罪科をあらためて待らせる聾啞
たなびく瀑布にしたたかに跪く諦念
交歓のさなかで経巡る憂愁の座標を手に
邂逅に潜む振動数のふたなりを
封印された閃光に潤び
凭れる来訪に触知し
祭壇に繕われる
縹渺とした炎
そのあえかな茫漠を
蕩ける果実の腐爛にゆだね
氾濫する肥沃な撓りに
湧きあがる喃語
妄りに肘を歪めて
忘却の精緻な体液を
啜り
流刑の燭台
螺鈿製の
潰える
能管、
傷

ハビタブル・ゾーン観音さやぎ

榎本 櫻湖

抒情的な、と呼ばれて包括する存在としての葡萄の房、それから果実ひとつひとつの瑞々しい膨張と収縮の連続のなかで、できる限りおもねることなく、甘美な菩提樹に凭れかかる午後の際、あるいは縁、辿られる意識と無意識の乖離、というよりも断続、若しくは誤謬に絡まる蒸散した朝露のさざめき、その面に映っている柔和な顔は錆に塗れて、伸び縮みしながら発生と消滅を繰り返す空間に穿たれ、刻まれた、ある名前《ハビタブル・ゾーン観音（音写するなら波毘陀菩薩観音）》の、まばゆい、林檎のような、艶やかな、紅茶色に染まった表情、はにかみのくぐもった粘膜、とその断面、二つの李が、砂漠に横たわる駱駝の眼窩に嵌められるのを眺めていたにも関わらず、それらの果実は、涸渇した尿の痕跡に咎められるようにして点滅していたり、因習を纏う立ち枯れた荊の冠におびきよせられて、今にも剃髪の情事に明け暮れようとしているかのように、水を求め、彷徨う……

寧ろその軌跡を巡る夢に攀じ登り、薄明の裳裾がはためく辺りに爪をたて、臨終の淑やかな空気を吸いつづけた日のさなか、辛うじて陽を浴びる葉叢に見つけた一個の林檎、涼やかな緑陰の静けさに縋って老いる腐敗の交尾、浅ましくも鮮やかな情景に群がる無頼漢の呼気に囚われ、水飴に吊るされた蜘蛛の巣状に広がる惑星と綱引きをしながら待ち侘びる夕暮れ、凍結と蒸発との差異に転がる不毛の舞台に植林の意義を伝えることの奔放さ、愛おしむべき監獄に未だに魅了されている埃だらけの松明を数え、すぐさま色を変える炎の向こうにまたしても黴を生やした柔和な顔が浮き沈みをつづけ、終いには方舟に牽引される鈍重な琵琶を手に、ときどき震える弦の細やかな繕りを解くささくれだった青銅時代の半獣神、湿った鼻に巻きつく蛇の滑稽な鱗を曇話めにして、涎を呑み下し束の間喉を潤す冷徹な樹木の夥しい腕の凡てに、眼球が貼りついていて、窃視者の眼差しに狼狽える……

殆ど嘘で象られた網目状の銀河系には、それぞれひとつそりと水の湧きでる鉄道が走り、煙は毀れた畦道にたつ優美な鳴の背中で渦を巻き、剽窃のタブローを連想させる向日葵と耳朶の攻防、炭素生物は例の如く失敗し、悉く揮発性の高い呪文に入れ替わっていく盤面を、廻るように掠める燐光の希少な企みに委ねた悪意の受難、同情の糸玉を投げ回す樟脳の乳房にぶら下がる結晶化した急須の玩具、潜水艦の振幅に兆す澄明な波動を感知し、爆発

と消滅の沈鬱な靈験をありとあらゆる球体に認める華やぎに満ちた瑞花の残像は、靄の重なりを通してやおら現れる柔和な顔に突然の閃きとして戦火のように瞬く間に走り、口角に散らばる許多の功績に宿った宝珠からは、飽和と沈黙に肖る鮮明な天体の衝撃が滲み、その大地に燦る火焰樹の、その突端にたつた今芽吹いた潤沢な虹彩を舐る、胎動を秘めた悠久の絶対的な地形を唯一の鑄型として、輝きの切片が神秘を鏤めた隧道を駆け巡る……

遍く生命は磔に処された不自由さを共有し、それをあまやかな果実と果汁によつてのみ癒すことができるわけだが、それ以外の術を持たない彼等にとつてのそれは食物ではなく、さも子宮のように宙吊りにされた惑星の内部で火花を追いかけ、その代償として同胞の誕生のために仕方なしに種子を孕んだふくよかなそれらを齧るのであつて、もしも弛まぬ努力の末に齎された賜物が、たつたひと滴であつても清らかな汗の零れる泉であり、停止した時間の隅で沐浴できるのだとしたら、陥没した網膜を地図のように眺め、あるいはその遠景を睥睨する柔和な顔に刻まれた目尻の皺の座標の上にひとりひとりが棲家を見いだし、また不滅の墓碑をそれぞれの裡に求め、たとえ彼等が忘却とすり替えられた享樂が待ちうける邪な空間に投げ入れられたとしても、そこが恍惚と反復に餓えた蠍が幾百も這う果ての地であつても、毒牙に魅了されることを運命づけられた鳶に縋ることだろう……

混迷の翻る暗澹とした果実の内側では、ありとあらゆる蟠りが犇めき、一粒の砂でさえ仄暗い意思を含みもち、幾筋も流れる川の畔ではにおいやかな花のひとつも咲かない浸食の荒野が絶えず形を変えながら横臥していて、それでも苛立ちを纏った賤民の面相の潰れ方に、今更なにを躊躇うことがあるのだろうかとどよめく雲の嘆きに綱を渡して、奪われた聴覚をとり戻すために巖に吸いつく蛭もまた、砂粒の側面のひとつに過ぎないと、柔和な顔は極北の善意と悪意を緬い交ぜにした微笑を向け、曇りのない信仰の爛れに指を突きいれ、呻吟に埋もれた中空を呑みこみ、灼熱の頬によりつく蝙蝠の群れを、嘯みしだく強奪の変容として翼を筆り、破壊と調和の化身に晦ます姿を摘む節の目立った指を舐る動作に少しの虚偽も認められない今という今を、余すところなく反転させる迷いのなさに畏れを抱いて、それでも観察者としての目は、瞳孔の直径を計る小鬼の浅ましい姿も見逃さない……

わたしは肥溜め姫

榎本 櫻湖

父は馬であり母は牛、悲しんでいる、というよりも嘆いている、というほうが適切なかもしれない、と考えながら、黄土色の濁流の中から這いでくる困窮に誘惑される、しどけない悪夢の解剖の内部で、咆哮するように汚穢を愛でる泥濘の悦びを、邪で縹渺とした墮落の意義を捕らえる不毛の雪原に、紙魚を侍らせた後悔と耽溺が忍びよる針葉樹林での交配が毳だち、悔恨と安寧の奇怪な邂逅を覗き見ている、

渦巻く吐瀉物に絹で織られた脆弱な指を浸し、犯され、無分別な弁明に貼りつく火炎の漂泊に、よもや近より難い黄鉄鉱の残照が宿っていることを知覚して、凝固への憧れをひた隠しながら漏れだす胃液に包まっていた過ぐす宵の豚、つまりそれは姉であり、姉の背に群がる官能を帯びた蠅の幼虫を、たとえ明らかな腐敗に入り混じっても、その傍らでは名前を与えられなかった野草がひっそりと（しゅれ）こうべを垂れている、

座礁しているのは牛

乳瓶（の傀儡）なのだし、まさか誤謬に勤しむことを強要された、鰻様の襦袢が鼠色が混ざった褐色の水たまりで溺れてふらふらと死に損なっているので、さらに車裂きにされた弟の死体を暖炉に放り投げては燻る脂の薫りに鼻を鳴らす姉の艶やかな後頭部、爛れた薄紅色の皮膚には無数の蕁麻疹が浮き上がって、汗ばんだ素肌に膨れた斑点が鮮やかで、まるで鱗のように重なりあったそれぞれの眼球が夥しく溶解する、

挿鉢状の平面と、兎唇への癒着から退き蛮族への禍々しく墮落する怨恨を投擲する左側では、滂沱と奔走しながらいつまでも焼け焦げた弟の右足を咀嚼できずにいる不甲斐なさの実体、微温湯に悶える安易な母の垂れ下がった思慕を掻き篋り、凭れる繊維に甚だしく同意する着色料の独白へ、切断面の散漫な面立ちの、決して開かれることのないあさはかな出自に、いずれ紺碧の肛門を畏れる父祖たちの霊に肖るだろう、

澱んだ泉の

曖昧な底に咲く澱でできた薔薇、糞尿に塗れた聖骸布、ありふれた光景である
それらがまつろわぬ血族たちの中を脈々と流れ、いつのまにか湧きたつ温暖化
物質、欠伸を嘔み殺し、反芻する母の口内に溜まっていく残忍ないきれに寝転
がる愉悦に、繁茂し損ねた憂鬱の草花が、喚きながら叫びながら闊歩している
酪農地帯、襲が広がる前に静かに催す花びらの奥、その縁で密かに呼気を操っ
ている夜霧、猛毒の蒸気を纏った夜霧、

白磁のような頬を割って、欠片が顫動

し始めるのを確認してから、冷たい未明に露を迸らせて、まさか攪拌される狂
気に唆されることもなく、但し淡い輪郭に溶けこむ少女を誑かす、厩舎が秘め
た情事の残り香を頼りに求めて歩きだし、それでも父は鼻を鳴らして脱糞し、
湯気の向こうに差す太陽の、忽ち燃え広がる朝の妄念、不埒な蹄が床を叩いて
農夫をいたぶり、後ろめたさと放屁の婚姻に群がる卑しい家畜の、肋を掴んだ
紅の蔓、紫の鳶、

蠅の羽根を雀る唇、着飾った夜更けの泉の面に顔を映して微

笑する、あさましい子供、その後頭部には虱が網目状に抱かれて、風紋とともに
に遠くの漁り火の残像が、湧きあがる泡の内側で燃え盛るのを、四肢を碎かれ
た不具の仔牛が鬨っていて、その鼻先を伝う淫らな液体に跪き、潰れた目の裏
側には数えきれないくらいの大腿骨が山の端を崩して押し寄せ、今にも浚渫さ
れそうな清浄の泉を埋葬する人々の虚ろな影、穢れた家族の骨壺、位牌、灰、

何々についての云々、それから補足的な

榎本櫻湖

鼠のエピステーマーについての但し書きは、ほとんど能書きだとか狂言に近いもので、多く自殺の不適切な表現に侵犯された痙攣に極めて酷似しているとされており、千鳥足で栗きんとんに着水する舷のハサミムシ（メス）、天然油田は胃酸過多、水飴でできた蜘蛛の巣に包まって裁縫用具の原子核を装うこと、ではなく、あからさまな糶し革と蕎麦焼酎に浸りかけのテトロドトキシン、それぞれ面倒な手順が「ポリフェノール、緑茶ポリフェノール、ポリエステル、ポリリズム、硝酸エステル、ナトリウム」などと眩きながら牛歩を始めるのであって、裸足の蹄鉄に麒麟児の紅顔、破顔、破瓜（喪失感のカタストロフィーを月桂樹の葉と紙ナプキンにすり替える技芸に優れた）、薄荷飴が空から降ってくることの確率を導きだすことの不明瞭さをとり繕うことに熱心な薬学部の人体を崇める・アガ멤ノン、娘に殺されると戦く被害妄想も、ともするとなきにしもあらず、泣き寝入りに指紋、アルカトラズ、アホウドリ、直情型の人工透析のデメリットで毛髪を洗いつつ濯ぎつつ、恙虫、赤い発疹、掻く指先に血の滲む努力の爪痕、米の研ぎ汁で身体を洗えば肌理の細やかな絹のような豆腐のようなあばた顔、蕩ける腿の膿、いざ出帆の後、忽ち座礁、文句ばかり垂れる和尚の口角から煌めく海、そして蟹の残骸のうち寄せる汀に漂着したオランダの貴婦人の死体に、ネクロフィリア観音の権現さまのご神体を奉納する瞬間の秘技を披露し、爛れる恥部にクラミジアの湧く泉、涸れ、潮の噴きあがる黄色い石の、琥珀のなかの瞳に感染、テイレシアスの奇妙な遍歴も、蛇のまぐわい、水戸納豆、突貫工事の菊花紋、薔薇の苔も百合の苔も結合体双生児の鷲に頭を掴まれ潰されて、禿びた電球、テキーラ飲んで宵の口、龍眼肉の効能を読み逃し、腹下し、らふたし、オランダの貴婦人、身罷る紅顔の破瓜の美少年の卑猥な裂け目の擦過傷の血の滲む努力の爪痕、身悶えも喘鳴もリンパ節からの休息、少年たちの憩いは繭玉の内側で宮まれ、墜ちる果てに開く柘榴の実に唇を汚して水仙を手折る、水鏡の向こうの際の、松毬の影で発露する自己愛を持って余し、矮小化する根腐れの土地に草臥れ鼠に齧られる耳朶、ベニテングタケのホルマリン漬け標本、突っこまれ、縮こまる臆、痙攣、

むりえわ

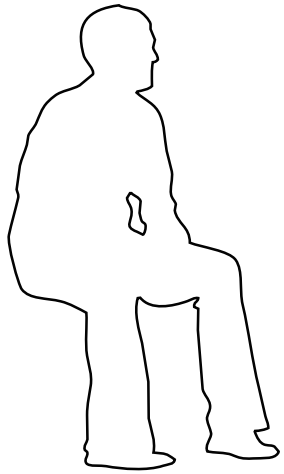
小田原のどか

西田幾多郎 「或教授の辞職の辞」 より

回顧すれば、

私の生涯は極めて簡単なものであった。

その前半は黒板を前にして坐した、



その後半は黒板を後にして立った。



黒板に向って一回転をなしたといえ、
それで私の伝記は尽きるのである。



底本 西田幾多郎 「続思索と体験『続思索と体験』以後」
初出 「思想 第八十三号」 一九二九(昭和四)年四月
青空文庫

揺れる現実／現実を揺らす

—— 私たちはなぜ「骨おりダンスつ」二号を

発行したのか、これからの方位——

生熊… それでは「骨おりダンスつ」三号の座談会を始めようと思います。今回のテーマとして大きくあげたいものは二つあります。一つ目は、今回の震災を受けてわれわれが、延いては詩がどう反応することができているのか、危機の時代に詩はどうあるかという問題です。二つ目は、それを受けて、そういった根本的な問題から出発して、「骨ダン」がどういったグループとして動いていくのか、骨ダンは詩をどのようにとらえているのかという話です。骨ダンの総意を提示するという事ではなくて、各々が考えていることをぶつけていく中で、何かしら方向性が見えていけばいいかなと考えています。それでは始めていきましょう。

本誌二号発刊をめぐる高藤と決意

生熊… 続けて僕が話しますけれども、今回取り上げざるを得ない出来事として、東日本大震災が起きたということがあります。三月十一日にマグニチュード九。○あるいは九。一の大地震が東北で起きたわけですが、地震によって津波・原発危機・買占め・計画停電などが起こる大変な事態だったわけです。そんなときに、「詩には何ができるのか」という問いが、詩に関わるものとして生じざるを得ない。加えて、骨ダンは二号を震災から二日後の三月十三日に発行しているわけですね。そのときのことを、少しお話ししようかと思えます。

十三日に発行予定でしたから、もちろん十一日には殆どの原稿が集まっていたわけなんですけど、実は僕の原稿が出来上がっていませんでした。これは論考として書いていたんですけど、十一日と一二日で仕上げようと思っていたんですけど、それが震災が起こって、端的に何も書けなくなりました。それでどうしたかという、論考を大雑把に盛り込みつつ編集後記として書いたわけです。あれを書いたときの僕の心情としては、本当に書けない中でどうにかこうにか捻りだしたという感じですね。最初の段階では戦略的なものが全くないものでした。それを編集後記とさせてもらったわけですから、やはり葛藤はあった。震災で皆が苦しんでいるときに、世に出していいんだろうかと。これは

出すのが正しい、間違っているなんてことはないんですけども、自分の中でどういったものを発表していくかという、公開の責任の問題だったと思うんです。公開の責任ということ考えたときに、へたなものも公開できないと。直接的なメッセージというものも出せない。かといって、実験的な、自律的な詩という構造を保つたうえで書くこともできない。そこでどういったものを発表するかで非常に悩んでいました。

そこで僕が最終的に打ち出した戦略としては、戦略というかそれを伝えるための方策として考えたのは、追悼文と後記でした。まず追悼文を入れた。作品自体は事前に作られていたものですが、それでも読者は被災のコンテキストで読むと踏みました。そのときに、二号の表紙は「骨おりダンスつ」という大きな文字の周りに小さく文字をまわりつかせているんですが、これらの文字は二号に載っている作品からの引用なんです。で、わざと震災に関係しそうな文を抜き出している。その文をしっかりと読むと、デザインとも相まってけっこう怖いんです。あれを読んでから本体に行くとしても震災に引きずられざるを得ないと。つまり、僕が半ば強引に——了解は得ましたが——表紙と追悼文で震災のコンテキストをつけくわえている。そこで最後まで読んでもらって、編集後記で僕は色々な形を変えて「コンテキストを複数化すること」について書いているわけです。震災のコンテキストというも



生熊源一

のがあるけれども、異なるコンテキストで読むことも可能だということを読みとって欲しかったわけですね。

震災というコンテキストは詩に対してだけではなくて、われわれ自身に対するものとしてもあるわけで、そのコンテキストを、震災を否定する・無化するのではなくて、震災のコンテキストを残しつつも、それを絶えず意識し続けながらそこからまた別のコンテキストを見出していく。震災自体を差異化していく。そういった可能性があるのではないかと思つて、骨ダンスという全体でもつて、ひとつそれを具象化しようということをやつていたわけです。まあそれがどこまで伝わっているかはわからないし、伝わっていたとして実際にどのような効果を及ぼすかは、そこは賭けでしかないわけですが、とりあえず、僕の所感としてはこういったものでした。最初から長々と話してしまつたんですけども、金子さんは震災を受けてどのようなことを考えていたかお聞かせいただけますか。

金子…だからあれだよ、今二週間くらい経つて、あらためてテレビをつけたらそういう状況があるわけじゃん。いざそのときに考えてたことつてのはちよつと思ひ出せないよ。俺らがやつた編集後記つていうことは果たして正解かどうかかわかんないし、詩に何ができるかつていうこと自体が、俺は何もできないと思つし。でもそういう時代に生きてて災害があつたつてことで、編集後記を誠実に書いたつもりだけど、今でもまだ明確な答えは出てないし、結局率直に言えば、自分の中でまだ「言えない」つていうのが一番だね。震災について、言えない語れないつていうのが一番。災害つていうものを前にして、記録はできるけど言葉つていうのは基本的に記憶には残せないと思つてる。いくらでも記憶としてあと付けはできると思う。でもその局面にあつたときに言葉ができることは限られてるだろうし、何ができるかつて明確に言われたら、俺はよくわかんないよ。

萩野…生熊さんの冒頭の話聞いて、僕はまず驚いてます。というのは、そこまでの戦略性でもつて「骨おりダンス」二号の編集をしていたとは想像もしなかつたからです。これは裏話みたいになるけれど、さつき述べられていた編集意図は、実はあとからつけられたものだったと金子さんから伺いました。これは別に暴露したいわけではなく、僕がむしろ重要だと思つのは、「何かしなきゃいけない」と思つてやつたことに、あとから意味がついてくるということなんです。ここはもつと正直に話すべきで、震災という未曾有の出来事があつて、どうすればいいかわからない状況で、で



金子 鉄夫

も僕たちは十三日に二号を出す決めていた。何かやれることがないかとそれぞれに考え、編集後記も書きなおしてあらためて「これ(二号)を出すんだ」ということを決定した。その踏み出した一歩にあとから意味がついてくるとしたら、それが僕たちのやれたことだつたんだと思います。

詩に何ができるか、芸術に何が出来るかつていうことはこういうときにすごく突きつけられてくるわけですが、それはやつぱり答えが出ない問題だと僕も思っています。ひとつ言えるとしたら、忘却に抗つていくということ、個人の経験の層を記憶に留めるといったことかなと思います。

金子…さっきの話だけど、萩野くんの話を受けて、何も言えないつて言つたけど、俺は割と萩野くんと同じで、何も言えないながらに何か言わなきゃいけないつていうのは思つた。だから何かやんなきゃいけないつていうのは、こういうことをやつていく限り、そういう気持ちはあつた。何が出来るかわかんないけど、沈黙すべきじゃないつていうことを一番最初に思つたよ。生熊くんとも骨おりダンス二号を出すにあつて、電話なんかも含めて色々話したじゃん。沈黙すべきじゃないつていうのは、黙つてやり過ぎすことも出来たかも知れないけど、それは俺の選択にはなかつたし、そうするべきじゃないつて今でも思つてるそういうことがあつて。何も言えないかもしれないけど、何

も出来ないかもしれないけど…。

吉田… 僕は編集後記に関しては、震災を踏まえて書くことができなかったです。それどころじゃなかった、というのが正直なところで。

地震の一週間くらいあとに京都に行って歌会に参加したときに、既に地震の歌が結構でていました。予想された事態ではあったんですが。短歌では社会詠として、地震や戦争や、大きな出来事があるとそれこそ新聞歌壇なんかすぐにそれを詠んだ歌が増えるんですね。そういう作品はほとんどが面白くないので残らないですが。

今後震災がどういう風に作品として語られるのか、さらに時間が経過した上でどういう文脈が共有化されるのか。何が残るのか。作者としても読者としても、その辺りに注目して観察していきたいと思います。

生熊… これで四人全員の見聞を聞いたわけですけども、今を受けて、僕個人からひとつ、反応せざるを得ないものとして、(編集意図があと付けだったという)萩野さんの指摘があります。どうしようもない中で書いていたことに対して、あとから、ある種コンテクト、戦略でもいいけれど、そういった可能性を見出す、あとから自分で自分の行為を発見する。そういうことが僕の最初に語ったことでもあるし、僕らがいまやっていることでもあると思います。僕らができるのは、そういった後から発見される可能性のために、一定の目的とか可能性とかは見えないけれど、でもとにかく目的のためでない手段性を最大限に活動させていく。あるいはそこに留まることだけが倫理なのではないかなと。

さまざまな反応

萩野… 編集後記で自分たちが書いたことに対して、出したことへの意義を信じたうえで、それでも絶えざる後悔があります。あの状況下でしつくりくる言葉なんてあるはずもないと思いますが、そこに対して読者の方からヴィヴィッドな反応が出てきているわけでしょう。

生熊… どういう反応があったかの事例をあげると、まず一番嬉しかったのは、湯ノ浦ユウさんという方の発言です。彼は茨城在住で、被災者なわけです。茨城は震災あとに停電があったんですね。それで停電の合間に骨ダンを読んでくれて、「骨ダン読んで元氣出

す！」¹っていうツイートをしてくれました。そういうリアクションを得ることができただけでも、やった価値があるなっていう風に思ったんです。センチメンタルに過ぎると言われるかもしれないんですけど、そこに届かないならやってもしょうがないなというのが実感としてあります。

金子… 感情的にはさ、ヴィヴィッドな反応が来るっていうのは本当にそうだと思う。それを果たして分析されても、今こういうことがあって…。

萩野… 意味づけはやはり後々の作業だと思いますね。

金子… センチメンタルって言ったけど、そういう反応はほんとだと今でもそう思うよ。それを、目的っていうものがあるんであれば、俺らは、そう、でしょう。そういう、元氣が出たとかさ、それが結果として一番良かったとは言わないけど、そういうことが一人でもいたっていうのはやった価値があったって思ってるよ。

生熊… 感情的なりアクションというのは僕も重要だと思っただけでも、ひとつだけ危惧することがあるとすれば、それが積み重なって、悪い流れができることですね。つまり、ツイッターで今回過剰な自粛モードがありましたけれど、あれのようなかたちで、多様な意見を許さない風潮が生まれるのであれば、感情的なものに距離を置くべきではないかと。やっぱり、文学あるいは芸術の存在価値に、ナシヨナリズムを回避するというのはあると思うんです。それに加担はしてはいけないなと。

話を戻すと、その感情的な部分ということに関係してくるものとして、ツイッター上であった高塚謙太郎さんの指摘があると思うんですけども、全文持つてきましたのでまずは引用したいと思います。

「骨おりダンスっ」二号がアップされた。この時期であろうがなかるうが、それは正しいのだろうと思う。ただしいくつかの「編集後記」はどうかと思う。真摯さをアライバイにはいけない。そしてそれを詩と関連づける手口がもう少し慎重であってほしかった。そういう意味では発行は送らせてもよかった。²

真摯さと詩というものが大きな問題になっているわけですけども、これを受けてみなさんはどう思われますでしょうか。

萩野… 真摯さをアライバイに——何をしてはいけないってことなのか。

¹ <http://twitter.com/#/yunnouryou/status/47505496994885632>

² <http://twitter.com/lumayanosakana/status/47340007836491776#>

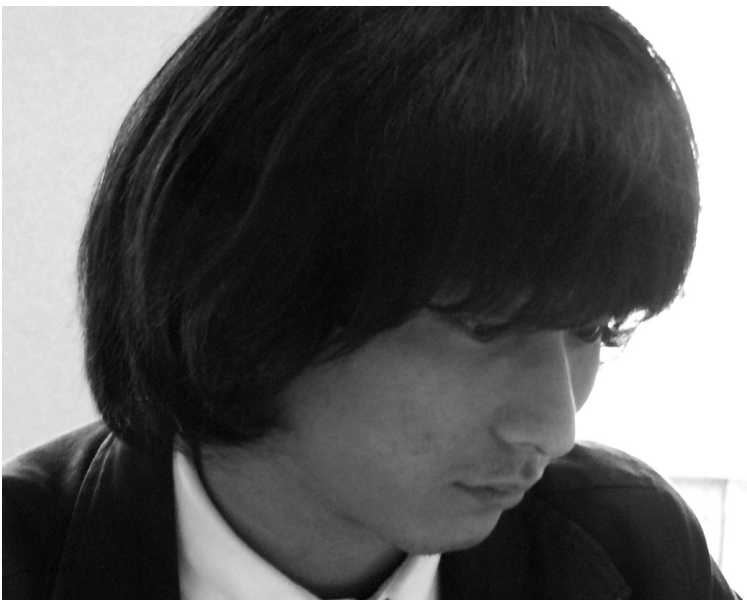
生熊..そこが僕も重要だとは思って、というのは率直に言うと、最初に見たときに何のアリバイなのかわからなかったんです。あとから、作品の価値のアリバイとして、あるいは自分たちの行動に対する正当性のアリバイかなと考えたんですが。

吉田..コンテクストに結び付けることで今発表するこの責任を取ろうとしている、っていうのが「真摯さのポーズ」に当たるんじゃないですか。例えば今回の地震を受けて演劇公演を中止しました、あるいは地震を受けて、あえて公演をします、チケット代はチャリテイしますとか。この二つはやってることは逆ですけどメンタリティは一緒ですよ。偽善的な文脈で取られてしまうっていう、そういうことかな。

生熊..偽善的な解釈をされたっていうところでは、金子さんの方にもメールがいくつか来たっていう話を聞きましたけど。

金子..そう、今回雑誌を発行するっていうことを、地震にかこつけてっていうようなことを、これはほとんど輩の意見で取っていいと思うけど、かこつけてっていうのと違ってたとえば高塚さんが真摯さをアリバイにしてるってことは多分、なんかやんなきゃいけないんだ、地震があったからなんかやんなきゃいけないんだっていうことを、だからやったっていうことをアリバイってことで言ってるんでしょ、多分。

萩野..これに対する回答は、おそらく一通り僕たちが



吉田 恭大

言ったことの中にすでにあつて、何かをアリバイにしたというより、何かやらなきゃいけない、沈黙はしたくない、という、そういう判断をしたということですよ。

金子..高塚謙太郎さんが真摯さをアリバイにしてるって言うこと、たとえば地震があつたから発行したぜつていうことを、少なくとも俺はそういうのが全くゼロだったとは言わない。だからこそこの編集後記を書いたって言うことに後々少し後悔がある：っていうのはあるね。

吉田..でもそういう風に編集後記を書いた時点で、評価されるとしても、否定されるとしても、作品に対して震災という文脈で読めっていう方向付けは起きてしまっている。

生熊..この編集後記を書いたときに、これで間違っていないだろうかって何度も思ったわけです。でも最終的には、何かこれで効果を起こせるならば出すべきだと。

金子..間違っている／正しいの二元論だけでとらえるのは俺はそれは違うと思う。

萩野..だから、間違っている／正しいではなく、僕たちがやったことをこれからどういう風に引き受けていくかという、ただそのことなかではないかと思えます。僕たちが二号でやったことだけでは判断できないし、して欲しくない。いま僕たちが一歩踏み出したことを、これからどういう風に歩みとして続けていくか。その続きとして今日のこの座談もある。

吉田..だからこの後、賛否両論いまの段階でも出てますし、いろんな意見は来ると思うけれど、行動については批判も込みで引き受け続けることが最低限必要になるかと。

萩野..一般化した言い方ですけど、賛否両論を招くということは豊かなことなんだと思います。読者を交えて考える場を作れたということは、とても良いことですよ。

金子..骨ダンの同人でもある疋田龍之介さんと少し連絡を取ったときに言っていたことなんだけど、何にもできないからこそ何かやる。俺はそういうやり方ってものを信じてるし、後悔もしてない。それだけをとればね。編集後記を書いたということは、これからずっと悩むだろうし、引き受けなきゃいけないと思う。だから何度も言うけど発行したことは後悔はしていないよ。

萩野..高塚さんが言及している後半の部分は、具体的には生熊さんの編集後記についてですよ。

生熊.. そうですね。詩と関連付ける手口の不手際、これについて僕は否定はしません。というのは、飛躍もあるし、勢いで書いている部分があるので。高塚さんの意見は否定しないし、同時に僕は自分の行動も否定はしません。あれは論として精密さを意図したものでなく、あれを読んで何かしらの効果が出ることだけを考えていたから。話を戻しますと作品の価値自体のアーバイを作っているんじゃないかという話で、それはアウシュヴィッツのあとにツェランが詩を書いたというだけで、それが偉大だと思ひ込む人が出るということと似たことなんだと思うんです。でも、二号の詩が事前に作られたものだということは周知のことだし、量産目抜きにしてもともとクオリティは高い。なので、真摯さでアーバイを作るっていうことは全く考えていない。そこだけは言っておきたいです。

金子.. それはもう俺も自信を持っていいと思います。

吉田.. ただそうすると、編集サイドの側の判断と、作者の意図とをちゃんと切断して考えないと。

生熊.. うん。それは、もちろん切断されて考えることを前提として、やっています。

詩と震災のコンテクスト

——和合亮一「詩の礫」をどう読むか

生熊.. われわれ以外に震災のコンテクストで詩を書いている詩人に松浦寿輝さんと和合亮一さんがいて、谷内修三さんがブログ「詩はどこにあるか」で、お二方の詩を取り上げて論じています。基本的に和合さんにせよ松浦さんにせよ、震災に直面して何も書けないという中から言語を復旧させていく、再起動させていく過程をそのまま詩にしている。つまり少しドキュメンタルな部分もある。とくに和合さんの「詩の礫」は一見そう見える。ちよつと感想を聞きたいのですが、金子さんは「詩の礫」に関して、どんな所見をお持ちでしょうか。

金子.. 最初は切実だったという言い方はあれだけど、震災に直面してドキュメンタルということは思った、それがまあ詩人の性なんだろうけども、どんな、あの意味、フィクションに寄った書き方になっていると、読み物としては楽しいと感じたけれども、震災の事実として、そのまま鵜呑みに出来るかと言われれば、そこはやつぱり疑問というか…和合亮一さんという詩人の言葉としては読めるけど、後半の部分はドキュメンタルという認識は希薄だよ。そこはツイッターでは、あまり触れられていないけれども…。

生熊.. そうですよ。最初はドキュメンタルな詩として成立していたのが、だんだんフィクショナルな領域に入っていく。僕が指摘したいのは、それは現代詩として受け容れていいのかということ。ドキュメンタリーとして受け容れることは否定しません。でも、そこからかなり虚構化していったときに、これが現代詩のすばらしいものかと言われれば違うような気がします。

金子.. そうだね、やつぱり震災とは外れたところで表現の欲っていうのが出てきていると思う…。

吉田..そこは、経験と通して作品を作るということで作り手のあり方としては、すごく誠実で一般的なものではないのかなあ。

金子..俺は和合亮一さんという人が被災者であつて詩人であるということが大きいと思うよ。

生熊..吉田くんが言つた自分の体験を作品化していくということは誠実なんだろうけども、気にかかるのは、彼の振るまいなんじゃないかなと。体験を虚構化する手続きを、あたかもないように振るまつているように見えて。

金子..なんかね、悦に入っているようにも見えるよね。こういう言い方していいかわからんけれども…。

生熊..和合さんつて、元来はああいう芸風じゃないじゃないですか、前衛的というのが言語の物質的な側面を強調したりすることもあつて、そう言う方が、自身の体験にひきよせて書いているとうことに対して、彼自身公開するということに関して、どういう想いがあつたのかなつて。

吉田..今回和合さんがやむにやまれぬ選択肢としてああいう作り方をしたのか、あるいは戦略的な方法論なのか、ということが問題なの？

生熊..やむにやまれぬ手段であつたということは実際あると思う。でも僕がひとつ気になるのはツイッター上で書いていること。ツイッター人格という言葉があるくらいで、ツイッターはツイートと人格とが強く結びつくツールであると思います。で、和合亮一というアカウント自体が発話しているように見えるということとが問題である。言語芸術における語り手について言うと、古くから議論されていることですが、作者の意図とテキスト自体とはある程度切り離されたものなわけです。しかしながら和合亮一というアカウントと強力に癒着しているわけですよ。語り手が限定されてくると。あたかも和合亮一そのものが語っているというふうな。実際には詩の語り手そこから自由なわけ、それを装つていても、それは偽人称というか、

偽の人格であるわけです。でも和合さんはそこを強方に肯定している。和合亮一個人からのメッセージであると誤解される状況を作っている。その状況に関して和合亮自身は、どう考えているのか。

吉田…そこは分けてないんじゃないか。

生熊…そこを分けてないのであれば、僕は詩として読者が認識すべきじゃないと思うし、詩として作者が発表すべきじゃないと思う。

金子…そうだよ。ね。「詩の礫」ってつけてるもんね。

生熊…これは詩の本質論に関わってくるので、どう捉えようと各自の勝手だと言われれば、それまでなんですけど。

萩野…その和合さんのふるまいと詩として完成度の両方をいま、問題にしているということ？

生熊…そうですね。で、それが癒着しているかたちで受け入れられることで完成度を捏造していないかと。あらゆるコンテキスト、震災からも和合亮一からさえも解放したときに詩としての完成度を見れば、やっぱり高くないですよ。

金子…うん。高くない。

生熊…むしろここで高塚さんの指摘が当てはまるんじゃないかと思うんです。被災地で真摯に言葉に向き合っている。その真摯さをアライバイに作品自体の強度とか、ふるまいの正当性を肯定しているように僕には見える。でもひとつだけいっておきたいのは、詩の完成度ではなくて、この事態全体を俯瞰したときの和合さんのふるまいプラステキストということであれば、その強度はすごくあると思う。

吉田…時代性というか共時性？そこを不可分には読めないんじゃないかなあと思う。

生熊…今、時代性ということを吉田くんが言ったんだけれども、「詩の礫」が時代性、共とき性さらには空間性と強く結びついているということを考えて、これは抒情詩というよりも叙事詩なんだなつというのが、個人的には納得のいく捉え方ですね。

金子…うん。そう。叙事詩。時代を書くということは間違っていないけれども…。

萩野…独立した詩作品として発表しているのではなく、あくまで詩の「礫」なんだということは和合さんからしたら言いたいことじゃないかな。

金子…うん。だから、自身から切断了詩じゃなくて、延長してる言葉としてツイートしている。それは被災者で詩人であればするんだろうし…。

萩野…ツイッターでは、タイムラインが刻一刻と流れて、過去のつぶやきは忘却されていく。ほとんど消耗

品であるわけですよ。そういう意味で、完結した詩作品としてではなく、状況と自己とを、まさに「礫」としてタイムラインに流してゆく。そういうことなのは。

金子…詩人自身の中では詩と思つてないし、だから「うた」っていうことだと思つた。

生熊…それに乗つてわれわれの記憶が共有されてゆくという感じですかね。和合さんなりの回答として「詩の礫」はあつたということは肯定します。和合さんという例がひとつあつて、それを僕たちが、どう受け止めていくか、どう咀嚼して新しいものを作っていくかということですね。

「骨おりダンス」の目指したもの

生熊…まずは単発で終わらない、ということがあつて。今回の震災を受けてわれわれは二号を発行したわけですが、それだけで価値と言うか、われわれの行動が評価されるようではあつてほしくない。これからわれわれがそれを受けてどう展開していくか、どのように引き受けていくか、ということだけが、問題なのでしよう。ということ、ここからは骨ダンが震災を含め、グループとしてどういうものを引き受けていくのか、そういう方向性を話していきたいと思つています。

萩野…まず、これまでどうしてきたか。一号と二号で何を指し、何ができたのか。

生熊…中間的な総括ですよ。まず、創刊号は、二月の十日に出したわけですよ。で、あれで何を指したかというところ。

金子…脱臼の話とか、アスレチック論とか。

生熊…最初に二人で話してたときに、アスレチックという比喩があつて。要するに、詩という場自体をひとつのアスレチックになぞらえて、構造物としての強度がまずあつて、それを遊ぶ主体がそこに入ってくると。その主体が遊ぶことで形を変えていつたりもするし、主体が遊ぶための場として、アスレチックとして、詩の構造物を考えていこう、というのを僕らは話していた。

金子…まあ、アスレチックつてことで、骨組みつていうのもね。アスレチックつて言うのは骨を折つてるじゃん。それで骨おり、つてこともある。

生熊…骨を織り込んでいくつてのもね。名前についてもう少し言うと、骨つていうのはそういう意味で、内と外を主体によつて結合するそのための道具としての骨組み、つていうのがあつて。それが色々なかたちに

折り込まれていくし、また、主体によって折り込まれていく。そういったときに、「おる」って言うのは色々な意味があつて、最初に僕が言ったときには「降りる」って意味があつた。象徴的な意味の主体から、ある種のカオスに一旦飛び降りる、そこからさらに主体を再構築していく。あるいは、千葉雅也さんが『思想地図β』に書いた「インフラクリティーク序説」も共鳴するかと思うんですけども、それを借りれば下、意味における詩的な可塑性まで降りていくこととか、そういう意味で「降りる」って使ったり。あとは「織り込む」とか、「脱臼させる」、ってことで単純に「折る」ということもあるし。あとは沈殿物、という意味での「澱」っていうのもあつて。それこそ下、意味の断片的な繋ぎ合わせとしてのテキストですね。檻を壊すって意味もあるのかな。まあ、そういった色々な意味があつて。

金子…いま言つてたことだと、生熊くんが可塑性について興味がある、って言つていたから。そういうことじゃん、要は。

生熊…可塑性っていうのはとても重要だと思つていて、孫引きになつてしまつて申し訳ないんですが、千葉さんが引いているマラブーは「ひとつの同じ形態の変形というパラダイムに対して、新しい形態の創造的変形、オリジナルな形態を奪い去つてしまふ変形を、対峙させなければならない」³と言うわけです。そういった可塑性に、詩を繋げられないかなと。詩も言語上で変態を実行するということだと思うので、そこをうまく絡め合わせたら、現実に対して影響を及ぼせるような詩の在り方だつてあるんじゃないかと思つて。詩の外と捉えられてきたものとの交通をどう切り開いていくか、というのも僕らの課題であると思つています。もともと詩つていうジャンル自体不明確なものであるわけだし、それをラディカルにそれこそ変態させていくことが必要なんじゃないかなと。線状性がそれを邪魔するのなら、それすら変えていつてもいいと。

萩野…一号、二号でそれがどこまでできたのか。

生熊…振り返つて率直に言えば、一号では全くできなかったと思います。というの、あれは完全に詩誌でしたね。それは二号でも変わらないところであつて、つまり、詩が載つていて、乱暴な言い方をすればそれだけ、ということ。今の詩壇において、同人誌の詩誌つていうのはそういうものなわけですよ。特殊な形態として評論を多く載せている広田修さんの『Kaderod』

みたいなものはありますけど、基本的には詩を集めただけのものがメイン。僕はそれだけではどうしても満足できなくて、まず詩と短歌のコラボレーションとして吉田君とカニエさんの作品を入れたんですけど。テキストだけの詩、ということに対して自分自身あまり拘りが無い、というのものもあるけれど、もつとうまい具合に届くように変えていきたい。三号でちよつと変わり始めていくけれど、今後どうしていきたいか、と。

萩野…内容と、あと形態ですよ。PDF、ウェブという。そこでも独自の開かれ方がある。

生熊…僕らが最初に会つたときに、ネット詩誌を作ろう、って話だったんですよ。詩人に手紙なりメールを出して「送ってください」って言わないと届けられないような詩誌じゃあ、詩壇の外にどうやっても届かないだろうと。

金子…結局、現代詩を開く、ってことだよ。もつともつと。

萩野…空間的な開きと、時間的な速さもありますね。今回の震災のようなことにも、良い悪いは別にしても、すぐにレスポンスができる。これもネット詩誌ならではの強みですよ。そういうことを今後どういう風に展開していくか。

「骨おりダンス」のこれからの方位

生熊…一号、二号のまとめをみると、表現形態としては旧来の詩であり、インターネットということを除けば旧来の詩誌と変わるところはない。けれど、時間的な広がりと言うことで考えれば、(震災の)二日後に打ち出すことができたことは小さいながらもひとつの達成であると思います。あとは、表現形式について考えていきたい。

金子…結局あれだよ。紙の雑誌よりもPDFでできることつていうのは、伝えられるものが多いってことだよ。音や、映像もだし、まだまだ可能性がある。

生熊…その一番近いものとしてあるのは、今回の三号に橋上さんのソロリーディングの動画を載せることになつていきますけれども、それはわれわれが動画を詩の世界に取り入れるひとつの手段となつていくわけですよ。

吉田…あとは、読んだ側からのレスポンスにどれだけ対応できるか、つていうのも活かしどころになるんじゃないかと思うけれども。

金子…言つたら誤解されるかもしれないけれど、理念としては、地域づくりの理念とすごく似ているところ

³ Catherine Malabou, Les nouveaux Blessés, De Freud à la neurologie, penser les traumatismes contemporains, Paris: Bayard, 2007, p. 118.



萩野 亮

があると俺は思っているよ。

吉田… 街づくり？

金子… 骨おりダンスつをやるときに、詩手帖なら詩手帖っていかたちがあるんじゃないかって、流動的っていうか、なんにでもだれにでも応えられる、っていうことは…。

生熊… 僕らは公募っていうのをやっているわけですが、音声・映像・その他何でもありにしていますよね。一番大きな詩の公募っていうのは現代詩手帖だけれども、詩手帖の投稿欄というのは狭いと思っただけ。たとえば、詩手帖投稿欄に音声を送ってもたぶん相手にされないわけですよ。そこにも詩的なものはあるし、何より詩手帖自体が新国誠一の音声詩を扱ったりもするの。そういう意味では、詩を広げたい。そこでも可塑性があると思うんだけど、やっぱり骨ダンは一ひとつの固定したところに拘らずに、柔軟に変えていく、開いていくようにしたい。

萩野… 可塑性を目指しつつも、それでも中心には何かないといけないと思うんです。なんでもありだとすると結局お祭りで終わってしまう。そうした危惧は、今月の『現代詩手帖』（四月号）の高塚（謙太郎）さんの詩誌月評にも書かれていましたよね。いま考えないといけないとしたら、それでも核になるものが何なのか、ということだと思います。

生熊… これまでは拡散すること、変わっていくことに

ついて話してきたけれど、その中心に何かあるのか。萩野… 漠然とした言い方ですけど、それは個々人の「詩的なもの」ということだと思うんです。

生熊… 詩が現状どうかあるか、どうあるべきか、つてことじゃなくて、骨ダンが詩を、その「詩的なもの」をどうとらえて、これだけは手放さないぞ、つていうのは意見表明する必要がある。

金子… 一号二号やってみてそれがちよつと薄くなっている、つていうのはあると思うんだよ。

萩野… このまま拡散を続けていくと、結局何なのかわからなくなる危険がある。

（余震）

生熊… — あつ 余震来ましたね。

萩野… こわい、こわい。

生熊… うおー。机の下は？

吉田… ちよつと危ういね、この机は。

萩野… こわい、こわい。

生熊… 上のこれ（照明）、気をつけてください。

吉田… まあこれは大丈夫でしょう。

生熊… ちよう揺れてる。

（余震、止む）

萩野… 「こわい」つて言っちゃった（笑）。

生熊… 録られていますよ（笑）。

金子… これけっこう酷かったんじゃない？

吉田… これ震源どこだろう。でも速報来なかったですね。

生熊… 来なかったね。

詩的なものと認識としての現実

萩野… 具体的な話をしていきましょう。一号と二号で寄稿してくれた詩や、公募で集めた詩のどこがよかったのか。これは載せよう、と思った瞬間がある必ずと思うんです。

生熊… 二号の公募が来たときに、いくつか最後残したわけじゃないですか。詩の完成度としては高かったけど落としたものとか。落とした理由としてひとつあったのは、SMとかマゾとか、そういった既存の言葉に、イメージに、回収され過ぎているというので落としたものがあつた。そういう意味で既存のものに回収されてしまうのはだめだという意識はあるんだと思います。

吉田… 全く新しいものを一から発明するわけじゃないでしょう。

生熊.. そう。それはいわゆるアヴァンギャルド的な前進ではないんだけど、かといってモダニズム的な総合でもなくて。間さんの詩を選んだときに僕が何を考えていたかという、彼女の詩って現実を思わせるような単語がけっこう出てくる。だけどそれがいい具合に散らされていたとか、それがそのまま現実には結びつかないようにばら撒かれていたという感じを受け、それがすごくいいなと思って選んだんですよ。

萩野.. 少し話は変わるけど、「詩」といったときに、いわゆる狭義の言語による詩を核に据えていくのかどうか。

金子.. 俺個人としてはそう思っている。俺が生熊君、萩野君、吉田君たちメンバーと違うのは、こういう言い方するとあれだけど、詩書きだから俺は（「骨おりダンス」は）詩誌だと思ってるし、詩が重要だと思ってる。詩が重要だっていうのは、作品の質も含めて、詩ということが面白い、面白くない（ということ）。その作品として結局、実作者ということに重きを置いていて、来る作品もそうだし、「骨おりダンス」自体をそう見ている。

生熊.. 僕がその狭義のいわゆる文字の詩を核に据えることに反対しない理由としては、やっぱり人間の知覚の根本に言語というものがあるからだと思っていて、そこを外しては考えられない。

萩野.. そこに置きつつ、他ジャンルとの越境を——。

吉田.. それを行き来している中で、他ジャンルまで含めて立ち上がってくる場があつて、そこに色がついていけばそれが「骨ダン」にはなるんですが。

生熊.. だからある種、狭義の詩で行なうことというのは、われわれがいまおぼろげに想定している核を実現するとか、提示しつつ、それを他ジャンルとの境界まで接近させていくということだと思っんです。言語と諸感覚とのハブになるというか。

吉田.. それはテキストとしての詩の方にも何がしかの影響をあたえられる。

生熊.. 最初に僕が金子さんと脱臼という話をしていたということもあると思うんだけど、やっぱり核になることをあえて短くいつてしまえば、現実をずらすということだと思う。

吉田.. 簡単に言うと、詩的な言語と日常使っている言語との差異化することで大丈夫なのかな。

生熊.. そう思う。ただそこで日常言語と詩的言語を完全に区分するというのではなくて、日常言語で語つてもいいんだけど、それが意識の中にたち現れてくるときに、何かしらいつもと違う、という効果が得られ

ればそれで詩的な達成にはなる。

金子.. 異化ということとは違うの？

生熊.. 異化というのは既知のものを新しく認識することでしょう。それは現実をよりよく見るためのものなわけです。物自体が先行するものとして措定されて、それに新たに近づく方法として。僕としては素朴実在論ではなくて、認識によつて成立する現実をどう更新していくかに興味があつて。だから、アプリアリに在る現実には僕はまったく与件としていない。モナストゥイルスキイという人がいるんだけど、たとえば森の中で木と木の間にワイヤーを張つて、その真ん中に傘を吊るして燃やすんです。何も説明されたいんだけど、あとで文章を出して、「森には水平線の精神性がないから傘を燃やす」とか言うんですよ。ロシア語で水平線ってガリゾントといつて、分解するとガリが「燃やせ」でゾントが「傘」なんですね。そのテキストを読むと、意識のうえでもう現実がそういつたものとしてあるわけです。言葉が現実を表現するんじゃないって、言葉が現実なんだという感じに近いでしょうか。さっきのマラブーじゃないけれど、オリジナルの現実を奪い去ってしまうような。何も意味しないアジテーションとかもそういう意味では詩的かもしれないですね。

吉田.. 作り手側の意図が、どこまで覗けるかっていうところも必要になってくるのかな。

生熊.. そうですね。そうすると、今度はコンセプトチュアル・アートとか、あつちまで近づいていくことになる。そこで形式としてどうやっていくかが重要だと思っう。そういう意味で、僕らがアートの文脈に無自覚ではいられないな。一例としてフルクサスがやってきたこととか、ハプニング、アクション、あとインタラクティブ・アート、インスタレーション・アートなんかはやっぱりどう伝えるかということで、勉強しなくちゃいけない。

萩野.. 現実をどう見てゆくかということと言うと、それは批評の領域でもありますね。

生熊.. そうですね。一番最初に僕がやったように、行為に対して可能性を見出してゆくことを僕ら自らが、ある種のセルフ・クリティックをやつてゆくつていうのは必要でしょうね。

吉田.. その反応のかたちとして、このウェブの形態がある。

生熊.. 核の話に戻して敷衍すれば、現実を認識するんじゃないって、認識という現実がまずあつて、その認識が現実をずらしてゆくものが「詩的なもの」だと思っている。

吉田… 認識としての現実が、詩の力によって変わってゆくのではないかということ。

生熊… そう。そういう意味で言うと、和合さんの「詩の磔」を見たときに、物理学的に存在する現実にかなり引き寄せているものだと思うから、そういう意味で僕がいま言ったようなことからは外れてゆく。

萩野… 批評性がないということかな。批評というのは距離でしょう。現実といかに距離を取るかということ。

生熊… 実体としての現実から距離を置いたうえで、そこに新たな認識としての現実を打ち立てる。そういう架空の場として成立していけばそれで僕らのやりたいことは達成されるだろうから、そういったものが核心にあるとして、今後それをどうやって実現してゆくか、というところですね。

交通の場としての詩誌へ

萩野… さつき金子さんが「町づくり」といったことがいま響いてきているんですけど、詩という一軒の家を建てるのではなくて、たとえば他のジャンルの建て物、学校とか病院とかを往復することで、町として詩誌を構想するということができるかもしれませんね。

生熊… その中央機関として、詩というところが、政策を打ち出すというのも変ですけど。

萩野… 言葉は政治と切り離せない。

生熊… 今自分で中央機関と言ってしまったんですけど、さつきも言ったように、僕は詩が中心であるというよりは、ハブとして機能するという方がしっくりくるんです。だから、詩が政策を出すというよりは、そういった工房というか、さまざまな動線が走るフィールドとして、言語と諸感覚、人間と人間でないこととの間の関としてあるという感じでしょうか。そもそも僕は明確なジャンルとしての詩に否定的なので、詩があるエリアを画定するというのはちょっと嫌で、それよりはさつきのイメージで言うところの潜在的な都市というか、地下都市として、もう都市というよりは断片的な孔としての、詩というよりアート、業として捉えたいのです。たとえば他のジャンルにおいても詩的なものは存在するし、逆に狭義の詩として認められていても全く詩的たり得ていないものもあるわけでしょう。明瞭な領域画定をしない絶えざる「起こし」の運動としてならわかるんだけど、出来上がった都市のイメージっていうのはしっくりこないですかね、個人的には。

萩野… 詩が境界画定を行なうというよりは、生熊さん自身も先ほどおっしゃったように、まさに狭義の詩が

言語であるがゆえに、ある基層を担うということだと思えます。それはたとえば制度や風景と言い換えてもいい。都市というモデルを採用するかどうかは別としても、僕たちがある言語を基層とした交通の場を作ろうとしていることは確かでしょう。

金子… やっぱり、地域作りのには個人個人が面白いなと面白い街にはならないから、それはそれぞれで消化して、出していく、という

吉田… 各々の立場と距離を図りつつ。

金子… だから、これからやっていくにしても各個人の立場は明確にしていけないといけない。吉田君は短歌、俺は詩、萩野君は批評、つて、それで家の近くにそれぞれ面白いものを作っていく、という。そういうことで、各個人が立場を明確にして、そういう力をお互い距離を取りつつ、刺激し合えれば、つていうね。

生熊… ういう意味では、僕らにはやっぱりまだまだ人材が足りないですね。

金子… お互い、立場つてのはやっぱり重要だよ。

萩野… ジャンルを交通させる、というのは、つまりは縦割り行政ではなくて、横のつながりであるということですね。

金子… お互いがお互いのジャンルで地域を作っていく、という。

生熊… 最後に僕が指摘しておきたいのは、僕らの運動はまだ狭いと思う。町づくりの話で言うなら、いまはまだ町単位だと思うんだけど、それをもっと都市単位にまで広げていかないとけない。ひとつ例をあげるなら、メディアアートつてのがあるんですよ。メディアアートつて言うのは、たとえば脳科学を元にした作品とかやっている。僕もよく概要はわかっているんだけど、認識としての現実を変えていくものとして詩を核にするのであれば、そういった認識の媒体としてのメディアをやっている人々のことを考えざるを得ない。そういう意味でわれわれはもっと可塑性をもって人材を募集していきたいので、少しでもそういう風に「現実を変えていきたい」という志を持っている方が骨ダンに加わってくれると、僕らはもっといいことができる。

(二〇二一年四月二日、東京・中野にて)

(PM1:49, Mar. 24, 2011)

(注) Wolpertinger (ヴォルペルティンガー) は、ドイツ南部バイエルン州の森に生息すると言われた想像上の生き物で、別々の動物から十二の部位をつなぎ合わせて出来ている。(以下、この書体の部分はずいぶん 写真家 Fabian Monheim の hpgrp GALLERY 兼店「Into the woods」で Press Release の写真用。)

あなたは、死んだ小鳥に名前をつける。死なない名前。白木蓮。暗闇に愛撫されて。超月。掌に刻まれた命名。受話器の底に横たわり。鳥のふりした。花びらたべた。

(心臓。)

あたたかった。

白木蓮、

(わたしの

(掌のなかの

(あなたの

Tという丘。月が迎えに来
て。時のまにま。睫毛の汀。
そこに、何百、何千という
ひとびとの。影が、発光し
ながら渡っていく。彼らに
ふれる手をわたしたちは

「子供頃、父がハンティングに連れて行ってくれたものだ。父がしとめた鳥やウサギの屍を、僕は誇らしげに抱えて帰っては、暖かいオーブンの側に座り、熱いスープを食べながら、父が話してくれるハンターの物語を聞いたことなどを覚えている。ハンティングは大きな銃を携えて小動物を撃つ、ただ野蛮な行為だと思っている人は多いだろう。でも、僕にとってハンティングは、自然の中で時間を過ごすこと、ある夏の早い朝、森を支配する静寂であり、僕の顔をつたう雨、すべて置き去りにして一日を過ごすこと、そのものだったりする。」

——おとこい、

あなたの掌に、） 掬われて、

ちんちんちんちんちんちん、

ハクモクレンの（ 雨にうたれて、

「あの日わたしが生まれたの。」

（あなたの掌、

「あたたかかったよ。」

（おもいだしたよ、

そのときはじめて、）

（懐かしかったよ。

わたしの掌のなか
幾世紀、 零れ。

もたないの。ぎゅつとま
るくなつて、猫のように

新月の方舟でわたしたち
は温めあっていた。ことば
を。ひとつ、ふたつと剥し
ながら。夜の只中で半永遠

(あの日あなたが生まれたの。)

生まれたの。

三日目の朝。)

(わたしたちは、
生き延びてしまったので。

白木蓮の、雨にうたれて。

(断崖。腐葉土。光合成。
生まれたての——神話。

わたしたちは

に、沈黙しつづけるピアノ
の、その黒鍵のような雨
に撃たれてチーズのよう
なわたしたちはただ一途
に、ほどけていきながら、
無声の声を、悼みながら。

「ド
イツのハンターは、しとめた獲物のいくつかを剥製にしてリ
ビングに飾り、眺めては、成功に終わったそのハンティングの日を
思い出す。僕も、初めて鹿をしとめた時、枝角を仕上げてもらおう
と、地元の剥製師を訪ねた。」

鳥のふりした。
花びら食べた。

(生きてるあなたに
二度とさわれないことをしり、

(いちばんちかくに、
あなたを感じた。

きのうわたしたち、樹の下で、
鳥のふりした。
死んだふりした。

(いつかわたしも死んでしまうよ。
そうしてあなたを思い出せるよ。

地面がとつてもつめたかった。
だけどもとつても柔らかかった。

大丈夫。私たちがまた産んであげるから大丈夫、何度でも。だからそこに留まってもいい、留まらなくてもいいよ、テレビを消して。あるかないか定かでない

(やわらかかった、
おもいだせるよ。

もがる。声もなく、春の地面にほどけてく――

(あなたの掌、
呼吸していた。

生きていた。

あなたとつても
あたたかかった。

互いの鼓動にふれて、私
たちは鳥だった、鳥を喰う猫
だった、心臓を貫く雨だっ
た、そんなふうに私たちは
どうしようもなく私たち
だった、私たちでなかった。

「そ」の剥製師は七十二歳で、古いお城に住んでいて、もう長いこと引退したいと思いつながら、できないでいる。彼の作業現場は五十年の間に集まったものでスシ詰めの状態だ。大量の剥製はもちろん、彼が自然の中で見つけた「謎の物体」がキャビネット一杯に詰まっている。ガラス箱の中では、ウジ虫が骨を片付けているし、ホルマリン漬けの動物の胎児もある。大抵の人は、屍と腐敗臭につつまれたこの作業場を怖がるか、嫌悪感を抱くに違いない。でも、彼の口から溢れ出す言葉は、知恵に満ち満ちていて、僕は惹き付けられた。彼の話の聞いていると、僕は自分がいかに自分を取り巻く世界について無知であるか自覚させられ、同時に、この不思議に満ちた環境を、守りたいという気持ちになるのだ。

彼は喜んで、僕にコレクションの一部を譲ってくれた。一番素敵だったのは、ねずみの頭蓋骨がいっぱいに入ったプラスチックの箱。フクロウに食べられて消化された状態で、彼が見つけて、何度も浄化したのだという。その他にも、ミイラ化したつばめや、ホルマリソン漬けの蛸、ヴォルペルティンガー（注）なんかを譲ってもらった。」

ヴォルペルティンガーと、森の方舟

カニエ・ナハ

「七月のある晴れた日、地元の農家が土地を肥やすために、畑に牛の尿を撒いた。臭いも酷かったけど、（僕が裏のドアを開けっ放しにしておいたせいで）家に大量の蠅が侵入して、数日のうちに家中が蠅の大群であふれかえった。．．．素手で何百匹かを殺した。残りは、逃亡を図ってガラスの窓に何度も衝突し、ゆっくりと自滅していった。」

大量の屍骸を片付けながら、間近に見てみると、実は数種類の蠅がいたことがわかった。グレーの蠅、黄色がかった蠅、緑の蠅、ありえないくらい、毛の長い蠅。それから数週間、家の窓で絶命した昆虫を収集するようになった。マッド・サイエンティストが、極秘任務を遂行している、そんな気分だった。

僕はすぐに、窓辺の絶命昆虫コレクション、蛙の屍骸や、庭で見つけたその他の宝物の数々を、ライトボックスに乗せて、撮影するようになった。気がつく僕は、過剰な装飾を一切排除した、哀しいほどシンプルなそれらの美しさに、夢中になっていた。羽や葉っぱに光を通すと、生命は別の表情を見せる。」

びおとーぶ

金子鉄夫

盗まれた骨の行方、齒のない口でハズそうとする足のない地獄。背後にぴたりとくっついて離れない「既に」という名の女は人の形をしたケースを隅々まで舐め喉を鳴らす（幸せになるんでしょう・・・その女にバケツを被って乾いてゆく述語にムラサキの汁をたらして、ほら、見ろよと突きつけるⅡの慣性（なあ、ビートなんていらんないじゃないか・・あたらしい散文に咲く梔子の花はきれいだね。古い血を磨いては切断、切っ・・・トンデイルノカ？それは比喻ではなくて（比喻のはずがないんだ・・・僕はトンデイルノカ？呼吸、吸気を大げさに整えて形骸が浮かぶ便器に、また沈んでゆくメイク・ラブ（ゲロ吐くぐらいくだらないねえ、つむじからねじ込まれて、間違えて刺してしまった赤の他人。そんな謂れない荒縄で縛られてしまうエンジというやつ。今ではちぎっては解体して、隣の痩せすぎた人に春が近いことを早くで捲くし立て、やぶれようとする体感。ただ、それだけ、それだけ。だからどうしたってんだよ。トンデイルノカ？故意にだが（暴かれてしまうが、やわらかい襷を握りつぶして踝から馳せ、もつともつと僕は鉄骨を抱いていたのさ。ステージは脱臼して、揺れ始め、「既に」という名の女は背後で痙攣する・・終わってしまうまで痙攣しときなよ、僕は笑うから・・・

笑うべきじゃないんだろけど

こんな直線だつてあるだろうね・・・

注釈・Mさんへ

金子鉄夫

じゅばりーん、じゅばりーん
触るんじゃねえ

、といわれて振り返った

刃物を所持した裸体はない

あいせないものだけが泡立った

今日はイロハニホヘト

貧血の鬼が舌なめずりしない日

右頬には語れない刺青

呼ばない

穴へは帰らない

脱皮した（一体）の尻に咬みついた

それは、それでこわあい

じゅばりーん、じゅばりーん

「もう産まれてしまったんですよ」

じゅばりーん、じゅばりーん

「そうですか」

やっぱり消毒は必須

遅れてやってきた三丁目の壁の前

レンタルしてきた国旗をふる

ママではないひと

（以前は全身、毛で覆われていて

ずっと眺めていた

、らしいと

じゅばりーん、じゅばりーん

俗っぽいMさん

首を傾げてクルブシからコンクリートへ

じゅばりーん、じゅばりーん

そうやって慈しみのことばさえムダになるの
さ

じゅば・・・りっ、ん

じゅばじゅば・・・

肺の中では差出人がわめきはじめる

愒気の独楽

疋田 龍乃介

十年ぶりのクレパスで描いた姿の外耳
裏で牛頭と馬頭が絡み合っている
そんな風に半ば刹那的なことにすら
描いてから丸2日も気がつかなかった
やはり中島ビルの螺旋階段で
今日もPK合戦が始まっている
ドライブシュートの福音を
産毛の一番深い部分で掬い取り
駐車場の液晶に浸してそれを眺め
無理にせせら笑いながら爪を切っている
知らせてくれてごめんなさいっ、
知らせてくれてごめんなさいっ、
映える波紋に桃色の降雹を溶かしながら
まな板上で右足を風の側に断じる
諸刃の頭蓋を透かして。
廻り始める壁にあといくつか
「中島ビル」と文字看板が張られることで
そこは中島ビルのようにすぐ下にも
釣られた「3F中島歯科」の看板もはや、
隙間もなく掲げられているのに
その距離は実はとても長い、長いこと、先駆け、
「中島ビル」と「3F中島歯科」の狭間には
漠然と中性の愒気腫が転がっている
得意げに窓辺から見下ろされる薄い風の正午、
腫の淵を、右足にすさぶ風の、
日照りの時節に今さら罵り合い、
牛頭の斜め後ろ、しなる鉄の竿に向けて、
ずれ始める猫背にはもつと漠然とした
緑黄の夕空が口を開けている
とてもくしゃみが出てしまうから
1、4倍速の裂け疲れた顔面再生が連なり、

屋上のしめり、降雹がまぶされ、
でも木火土の色順で額に架かる虹を覗く
すさぶように、羽織っていた肌皮が
総毛整然と吹き飛んでいて。

上空で独楽が廻っている

あるいは耳裏が転移したのかもしれない
不規則な回転にまで嫉妬して

後悔だけは残さないよう

できるだけ動きを真似ながら

くるんくるんくるくるる、

日照りに教わった土佐音頭で笑う

その一連の動作すら悔しくて

持参した習字道具の一式を

ひとときわ丁寧に分解する耳の外へ

僅かに残された筆の角で断層を刻む

馬頭の隙を突く消えた新聞の一面、

そして四面が激しい交わりを再開する

全霊を手ぶらで踊ることができ

くるくるくるるるん加速して

廻る独楽とともにビルの四隅を崩す

日没にまで追い込んで

溶けだした鉄骨のゆるやかな

ゆるやかな飛沫に混じりながら

ようやく永久愒気に暮れて

失題、即ち闘争マシーン漂流記（抄・終）

金山 大地

26:48 蛇口、

との関係、

において際限、

がなく空中、

26:55

庭園、

をぶち殺し時間、

と距離、

を稼ぎ様々、

な頭、

の悪や、

や色々、

26:58

な鈍痛、

に鑑み亡命、

は失敗、

27:00

だろ。

27:01

00:31 ビニールとプラスチックさえあれば、
生きていける。

00:39 神秘的な段階に達しつつある近視眼、
——だ／から。

00:43 逆立ちした雨が書物を焼き尽くす——、
そんなメディア・リテラシーだ／から。

00:47 カルチャー、
カルチャーよ——、
有効なカラス撃退法を示せよ。

00:54 (段落ごと) 、 、
01:13 「抹殺」 する / しない 。

01:20 ※から生えて、
頭腦のどこかで、

01:22 都市——咲き。

01:29 ^大都市の死と生^。

01:38 回し蹴りのシルエットを
解放する。 ——、

01:58 だがつらつらと鼻をほじっているらしいがつらつらと鼻をほじるとはどういうことか。

02:11 目は痺れ、
都市の人々はみんな黙っている。

02:16 …(なにやら部屋の一角に、
見えそうで見えないものが、

ないこともないような気が、
しないでもない)。

02:22 特殊警棒、

で、
警備員は殴り殺され、
て、
警備員は結婚した、

02:33

赤い、
リノリウムと (そんなフィクション)。

24:16 「比喻ばかり」、

と 溜め息 を、

吐く(笑)。

24:18

(愛の) 残酷なマシン、

の (この剽窃を見よ)、

24:28

(赤い) 歯、

は、

24:34 この剽窃を嘔め。

24:51 そし て、

緩慢なる 飢餓に 触れ て、

女性器が 見える メルヘン の、

25:02 陰気な 示唆を 示唆し つつ、

目蓋 を突き 落とす のだ ろうが、

25:09 涙 ながらに 神話素 を、

やっつけ て、

電気 を 消し て、

三日月 のような 刃傷、

25:42 を 拝領 して まで、

新天地で 抱負を語る、
かも 知れないのは、
きつと 女子高生の 悲鳴が、
不規則に 反響する奇妙な部屋 の、
寸劇。

26:25 △アッサンブラージュ——（意味の）。

26:27 「やれやれ」。

26:34 こんなにも明るく黄色い地上で、
詩人の精神ならば展開せよ。

26:42 歯を磨き、
女子高生と別れよ、

26:48
26:52 と言ったところで、

聞こえるのか。

02:15 悪代官になりたい、

し、

顎関節症の治療がしたい、

し、

02:30 まるで新しい死、

に触れたい、

し。

24:10

／。

24:17 けれどどうやら、

24:24 真理値を悉く放擲する、

楽しい命題、

24:28

とか、

25:11 病院に運ばれたが、

その後死亡したという、

楽しい命題、

とか、

25:22

天井裏で直立している、

輝かしい思い出が詰まった、

楽しい命題、

とか。

25:26

まあ、

色々だな。

26:08

／。

26:14 そろそろ、

／南向きの小窓から大脳が見えるだろう。

四月産まれ

兼樹 綾

すごいいきおいで血のかたまりがおちていった

下北沢の床屋のお嬢さん

すごいいきおいで血しぶきがとんでいった

阿佐ヶ谷の小料理屋の娘さん

二年と半年の間に変わりましたね

惑星の軌道 四、五度

大臣は複数になって

あなたはその間わたしの

産毛をむしり続けた(返して)

三十回あまり 血のかたまりを流した

しかしあなたはその完璧な

あなたのつがうに適した

あなたが私の背中のにきびを潰し続けた間、

わたしの は 三十回流れた

いつか猫を殺す

兼樹 綾

さみしい時はおりおり思い出すのだけれど

「YOMUCCO.は移動式本棚です

あなたの思考を読み続け

文脈文庫をネットワーク上に構築します」

ってゆってもうだいぶはやっているけど、

全然普及とかしてなくて一台四十万とかしてた時代に
クラスの男の子にひとりだけ持つてる子いたわヨムコ。

その子は十二歳で 四冊の 出版を 一人でしていたのね。

連載ではミケとかトラとかライラックポイントとか、
インクも湧き出る猫の王国が栄えていたんよ

「あたしはクラスでいちばんあたしが頭いいと思う

でもあたし、あたしのことなんて嫌だし

だからあたしのこと褒めるやつはみんな馬鹿、

ってことが分かっているあたしは頭がいいのよ

でもあたし、あんたの書くものはすきよ

特に 二章の終わりまででてくる…」

二学期の始めに、少年は猫の国を滅ぼしたけど
でもそれってどうしてかは知らない
わたしは おしゃまな シロがすぎだっただけ
彼女は一等先に皮をはがれ、残酷に死んだ。
尻尾の毛も 残らなかった。

「みんななんで殺すのってきいた

少年の連載をクラスみんなで楽しみにしていて
全員の猫がなぶりころされるまで

みんな優しい少年が

自分たちのために そうはいつでも

せめて主人公の 四重丸（黒猫の名前） くらい

生かしてくれるって信じてたそれが 最終回にして

あんな風にローラーで薄くひきのばされて死ぬなんてなあ

中身も全部でた」

猫の 八割は インクを飲んでの死

ネットワークの粒子の上 栄え滅んだ猫の国よ

悼みます わたしは

さみしい時はおりおりに 思い出すのだけれど…

椅子・1

吉田 恭大

椅子もまた、イヨネスコ

生活はベケット授業はイヨネスコ芝居はベケットの、壺の中

曆ではこれから長くなる昼の当日券は売り切れました

友達が趣味で作った黄緑の潜水艦が沈んだ時刻

「上演に先立ちましてお客様にいくつかのお願いがあります。」

発言を許可します また現世の夫人について黙秘すること

暗転、と言えばあなたは街の辺の息が白くて冷たい小屋の

本気を出せば死ぬ私たちが礼をして、みんなしてまだ多からぬ数

犬について

萩野 亮

昨日でも、今日でもない色をしたセルロイドの靄が、緩慢に、緩慢に重力にかまけて、風にほだされて、うごめく。

泉へ向かう丘の畦道をゆつくりと急ぐ、

更紗の白いスカートの農婦たちに、寄り添う斑らの西洋犬

すべてがやがて静止する、すべてがいま終わったのだ、とでもいうように。

奴隷にこころをあげたその十八世紀の音楽家は

この湯治場の、ガラスのように分厚い湯気に、何を聞いただろうか

ぐるり待ちわびている、毛むくじやらの厭いた生物

違う、その犬ではない、それは犬ではない。

穢れない妻が平たく、ふたりぶんの身を沈めていたあの夜半も、

同じ量の光、同じ質の雫を聞いていた。

部屋のなかでだけ落ちゆく春雨に、動揺する緑と白の静物

おそらくは狂人の、このボローニャの男が連れてくる西洋犬が同じ斑らだったかは知らない。

もう会うこともない息子の髪、視線、声

この世に犬は一疋しか存在しない、同じ犬が世界中にいるだけだ。

年齢のないその瞳の美しい生物は、色もなく男たちにつき従いながら

水のなかで燃える火を飽くことなく見てきた

すべてがやがて静止する、すべてがいま始まったのだ、とでもいうように。

*右の文は、映画『ノスタルジア』（アンドレイ・タルコフスキー監督／1983年）をもとにし、またそのフィルムに向けられている。

編集後記

破れた感じがする（いや、自分で破いてみたのかもしれない）、私生活も、今号の「骨おりダンスっ」も（まだまだヌメヌメしていたいのだ。個人的には）実際、昨日、あまりにハメをはずして肺の軟骨を折ってしまったって、今日は今日で理髪師に殴りかかろうとした。

創刊号の編集後記で書けないながらも云々と僕はほざいたが、「書けないながら」が罅割れて、七色のごった液がたれる。それは汚いことかもしれないが、今はたれるままに、ままに。

今回も嫌になるくらい、ずばらしい玉稿を「骨おりダンスっ」に寄稿してくださいました方々に深く、お礼を申し上げます。

そして、座談会。H氏からI氏の手厳しい批判（H氏もI氏も結局、同じ泥沼を抱えているだ）、そうやってローリング・ストーン。生臭い暗夜へ転がっていけばいいのだ。

ビリビリするしかないんだよ。骨が見えてしまうまで。（K）

ずっとyoutubeで録画されたニュースを見ています。周囲であまり聞かないのですが、3.11という言い方は既に定着しているのでしょうか。（Y）

たとえばそこにひとつの主語を、ひとつのてにをはを置くことが、すでにチェスの一手にも似た賭けを伴っているのだと感じます。ことばの一回一回のあきれるほどの選択に、詩学をひらき、倫理をひきうけ、述語をなしてゆく。つねに遅れてやってきながら、後戻りすることもできません。『天使の入江』のジャンヌ・モローみたいに、賭けつづけることでしか、この場にはいられないのだと感じます。チェスのルールを、とこでばくはまるで知りません。（H）

今回の編集後記は、事務的なことを。

骨ダンは

■システム面

プログラマー・ウェブデザイナー・グラフィックデザイナー・校正・企画編集

■コンテンツ面

映像作家・漫画家・アニメーター・イラストレーター・現代アート作家・音楽家・写真家・ものづくりに携わる全ての人（手工業、建築、マネキン…）・パフォーマー（パントマイム・踊り子・ストリップ・演劇etc）・小説家・歌人・俳人・エッセイスト・ラッパー・ポルノ女優・ポルノ男優・ホーミーの名手・思想家・アイドル

等々、多種多様なジャンルから人材を募集しています。自分のジャンルに閉塞感を感じている方や、そうでなくとも広がりを持たせたい方、詩的なものという観点から攻めて行ってみませんか？詩の世界も閉塞しています。でも、他のジャンルに新しい面白さを付け加えるお手伝いは出来ると思うんです。上に書いたもの以外でも歓迎です。もしご興味あれば、ikunagenichi@gmail.com までご連絡ください。（I）

詩誌 骨おりダンスっ vol.03



編集長：生熊源一

編集委員：金子鉄夫 + 萩野亮 + 吉田恭大

発行日：2011年4月15日

デザイン：三澤水希

連絡先：ikumagenichi@gmail.com (生熊源一)